

# お熱い、脅迫状

H・フレッド・ワイザー

仙波有理訳

1597



*DEADLY STAKES*

A HAYAKAWA  
POCKET MYSTERY BOOK

仙 波 有 理  
せん ば ゆ り

英米文学翻訳家

この本の型は、縦18.4センチ、横10.6センチのポケット・ブック版です。

検 印  
廃 止

〔お熱い脅迫状〕

---

|              |               |
|--------------|---------------|
| 1993年5月20日印刷 | 1993年5月31日発行  |
| 著 者          | H・F・ワイザー      |
| 訳 者          | 仙 波 有 理       |
| 発 行 者        | 早 川 浩         |
| 印 刷 所        | 星野精版印刷株式会社    |
| 表紙印刷         | 株 式 会 社 T K M |
| 表紙製版         | ミツミ製版株式会社     |
| 製 本 所        | 株式会社川島製本所     |

---

発 行 所 株式会社 早 川 書 房  
東 京 都 千 代 田 区 神 田 多 町 2 ノ 2  
電 話 東 京 3 2 5 2 局 3 1 1 1 (大代表)  
振 替 東 京 ・ 6 - 4 7 7 9 9

---

〔乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします〕

ISBN4-15-001597-X C0297  
Printed and bound in Japan







---

H. FRED WISER

お熱い脅迫状

DEADLY STAKES

---

H・フレッド・ワイザー

仙波有理訳



A HAYAKAWA  
POCKET MYSTERY BOOK

日本語版翻訳権独占  
早川書房

© 1993 Hayakawa Publishing, Inc.

DEADLY STAKES

by

*H. FRED WISER*

Copyright © 1989 by

H. & L. FRIEDMAN

Translated by

*YURI SENBA*

First published 1993 in Japan by  
HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by arrangement  
with WALKER AND COMPANY  
through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

本書をわれわれの両親と  
すべての勇気ある男女に捧げる





お熱い脅迫状

## 登場人物

- ジェシカ・マンロー……………私立探偵  
ジェイスン・レディー……………私立探偵。ジェシカのパートナー  
アルシーア・ウォルターズ……………州会議員  
ヴェロニカ・ウォルターズ……………アルシーアの娘  
マシュー・テイラー……………不動産業者  
ボリス・ラドヴィッチ……………カー・サービスの運転手  
ヴィンス・ハートル } ……………ポルノ俳優  
マリー・セルビー }  
ヴァレリー・クロケット } ……………州会議員  
メル・ピアース }  
フランク・ファルコーネ……………ディスコ経営者  
ジョック・オトゥール……………フランクの用心棒  
カマル・ミーラム……………不動産投機家  
ハワード・ガーヴィン……………弁護士  
ジョナ・スレイカー……………ニューヨーク市警の巡査部長

女性州会議員、アッセンブリー・ウーマン

いや、アッセンブリー・パーソン 州議員はプラスチックとクロ

ームでできた依頼人用の新しい椅子のうえで、気まり悪げに尻をもぞもぞ動かした。プラスチックの色は純白。これは性善説を信じるわたしたちの気持ちのあらわれだ。

この建物の二階にある小さなオフィスに州会議員がほんの数秒前にとつぜんあらわれたとき、わたしたちの頭にはホームメイド・ポルノだの、脅迫だの、政界への工作といったことはまるでなかった。議員はお気に入りの元生徒にちよつとしたことを頼みたいという言い方をした。お気に入りの元生徒とは、パートナーのジェシカ・マンローのことだろう。わたしは教師に好かれたためしがない。

電話もかけずにふらっとオフィスにはいつてくるとは、か

なりの度胸だ。なんでわたしたちがぼんやり座って仕事ができるのを待っていたのがわかったのだろうか？ わたしはあくびをした。

議員はここにやって来た理由をきりだせないでいる。淡いはしばみ色の目が、わたしからジェシカへ向けられ、そしてまたわたしのほうへもどってきて——それから自分の膝にのせた本の大ききほどの茶色い包みを見た。視線は結局ジェシカのうえに落ち着いたが、それでもときどきわたしのほうをちらちら見ている。まるでステレオ放送でピンポンの試合を見ているみたいだ。わたしはデスク・マットのうえの月曜の朝の郵便をいじくりまわした——ほとんどが請求書。

議員はごくりと唾をのみ、話をはじめようとした。「あなたお一人で仕事をしているのかと思ってました、ミズ・マンロー」

「がっかりさせてすみません、ウォルターズ教授」

「今はミセス・ウォルターズよ」

「まえもそうでした」とはいわなかった。しかし彼女が教授ではなく講師だったことは、ジェシカもわたしも数年前ブルックリン・カレッジで彼女の政治学の講義をとっていたとき

から知っていた。ブルックリン・カレッジのような一流大学では、博士号をもっていなければ教授という肩書にはありつけないのだ。

「それでは、ミズ・ウォルターズとお呼びしましょう。ジェイスン・レディーとは一年以上いっしょに仕事をしています。ミスター・レディーのことは覚えていらっしゃるでしょ？」

ピンポン・ボールがふたたび部屋のこっち側にとんできた。覚えてるにきまっている。教師というのは、優秀な生徒とトラブルメーカーを忘れない。わたしは前者ではない、とだけいっておこう。

ウォルターズの目は、言葉をつづけるジェシカのうえに戻っていった。「ジェイスン・レディーは昔からの友達です。いうまでもなく、完全に信頼できます」

おやおや、こんなにヨイショしてもらえるのなら、もっと気乗りのしない依頼人に来てほしいものだ。

このときには、デスクのうえの請求書はきれいなふたつの山に整理されていた——すぐに支払うぶんと、あとまわしにするぶん。わたしは信頼のおけそうな表情を懸命につくってみた。努力の甲斐があったとみえ、ウォルターズ議員はジェ

シカに向かつて、ついに自分の抱えている問題を話しはじめた。

ピンポン・ゲームがおあずけになったので、議員をプロの目で観察するチャンスができた。なんたって、探偵を本業にして一年以上になるのだ。ホー・チ・ミン街道で秘密工作に携わっていた時期は勘定に入れていない——あんなちよいいことは仕事とはいえない。

茶色の紙包みは、まだ依頼人候補の膝のうえにのったままだ。議員はときどき熱いアイロンにさわるようにして包みが無事なのを確かめていた。

アルシア・ウォルターズはベイ・リッジの良識ある有権者によって州議会に送りこまれた議員だ。魅力的な中年女性で、はつきりとした目鼻立ちをし、いかにもタフで有能という感じがする。肩までの長さの茶色い髪はうしろへかきあげ、額をだしている。よく見ると、何色ともつかない灰色がかった毛がひとすじ、ふたすじ混じっていた。夏向きの軽い生地のできたシンプルな黒の半袖ワンピースは、上から下までまっすぐなラインのドレスで、ぶかっこうこのうえない。あのドレスの下にはなにが隠されているんだろう？

年齢はたぶんわたしより二歳上というところか。大学時代、わたしたちのそりが合わなかった理由のひとつがこれだ。他の学生はほとんどが若い連中だった。わたしはヴェトナムでのお勤めを終えてから、アンクル・サムのおかげで大学にはいったクチだ。あのころだってウォルターズはこっちより二歳年上だったはずだが、地獄から生還してきたばかりのわたしはモーゼよりも年をとったように感じていた。ほんとにそうなのかもしれない。そのうえ、わたしは頭がちよつとばかり切れすぎた。

ウォルターズは、他人のオフィスで膝に小さな包みをくいこませて、おとなしく座っているよりも、命令をくだすほうが性に合っているように見える女性だ。指はぎゅっと包みをつかみ、どんなことがあっても手放したくないかのようだが、結局はこっちに渡すことになるのだろう。包みはジェシカにしゃべっている話と重要な関係があるらしい。

「普通の郵便で来たの。テープよ——ビデオの」

「再生してみました？」ジェシカはいつもいい質問をする。

ウォルターズは自分では気がついていないらしいが、茶色の包み紙の一部をひきちぎり、今はそれをさらに細かく破い

ていた。「おぞましい内容なの。わたしが写っていて」ウォルターズの膝のうえに細かく引き裂かれた茶色い紙の山ができた。「でも、あれはわたしじゃない。わたしはあんなことはぜったいにしない」

「つまり、脅迫っていうことですか？」ジェシカが訊いた。「脅迫？」

「あなたを陥れるような内容のビデオなんですよ？」

「ええ、そう」

「テープのなかでなにか要求していませんでしたか？」

「いいえ。なかったと思うわ」

「手紙は？」

「なし」

「電話も？」

「ない」

「だれがテープを送ってきたのかの心当たりも？」

「ないわ」

ジェシカはデスクのしたから十ポンドのダンベルをとりだした。緊張するとガムを噛みたがる人間がいる。タバコを吸ったり、コーヒーをいれる人間もいる。ジェシカはワークア

ウトをはじめ——どこでも、ところかまわずだ。カールがはじまった。右腕五回、左腕五回——その他いろいろ。これで、ものが考えられるというわけ。

「ミズ・ウォルターズ、わたしたちにテープを見せてください」

ウォルターズがぎよつとした表情をうかべたのは、「わたしたち」という言葉のせいだろう。彼女は顔をこっちに向けた。顔と首に血の気がないのを見て、わたしはウォルターズの椅子のしたの床に目をやらずにはいられなかった。血だまりができているのではないかと半ば期待してだ。血液の行き先はそこしか考えられないではないか。

しばらく押し問答がつづいた。ウォルターズがこっちに向ける目つきのせいで、自分が卑劣な好色漢になったような気がした。結局、テープはジェシカのデスクのうえにのった。

二百ドルの前金と、サインした契約書もいっしょに。そして、契約書のコピーは議員のハンドバッグのなかに納まった。

「あのテープを見るのはもうごめんよ」ウォルターズ議員は激しく首を横にふった。「生まれてこのかた、あんなことは一度だってしたことないんだから。たしかにテープに写って

るのはわたしだけど、でもどうやって撮られたのかわからない。またテープを見なければならぬのかしら？」

「今はけっこうです」ジェシカは議員を慰めた。「でも、そのうちあなたの協力が必要になるかもしれません」

依頼人の体に震えが走るのが見てとれた。

ジェシカは安心させるように議員の背中を軽くたたいた。「心配しないでください、ミズ・ウォルターズ。だれの仕業かつきとめてさしあげますから」

ウォルターズはたいして安心したようには見えなかった。

「いったいだれが——？　なんでこんなことをする人が——？」

「犯人を見つけたらわかります」ジェシカはふたたびウォルターズの背中を軽くたたき、彼女をドアのところへ送っていった。「今夜電話します、ミズ・ウォルターズ」

しばらく待って、もうウォルターズに話が聞こえないだろうと判断すると、わたしは訊いた。「彼女はどこで遊びが私立探偵をやっているって聞いたのかな、マンロー？　それに、なんでパートナーのことは知らなかったんだろう？」

ジェシカは一瞬、間をおいてから答えた。「ウイメンズ・



クラブでときどき顔を合わせることがあったの。あなたとチームを組むまえのこと」

わたしは顔をしかめた。ジェシカはわたしがウーマンリブをどう思っているかを知っている。「あのレズのたまり場？」

「レズのたまり場なんかじゃないわよ、ジェイスン・レディ」

「ほんとに？ それじゃ教えてくれ」わたしは勝ち誇ったようにいった。「なんであそこに出入りする女は、おれとベツド・インしようとしらない？」

ジェシカの唇にちらりと微笑がうかんだ。「考えたことない？ たぶんその理由は、彼女たちがレズじゃないからだとは」

「あう。今の発言はロー・ブロー」

「でも、大当たりでしょ。それじゃ、ビデオを見てみる？」

テープはVHS。わたしたちのパナソニックで見られる。

ひとつしかない窓のブラインドをしめ、蛍光灯を消して、オフィスを薄暗くした。部屋のなかでは大型テレビの画面だけ

が輝き、画面では肌色をしたものが青一色の背景のなかで動きまわっている。デスクからでも画面はよく見えるのに、ジェシカは床に座ってワークアウトをしながら、映画鑑賞をした。

あれはわたしであって、わたしでない、といったウォルターズの言葉は正しかった。画面のなかの裸の女が、わが愛すべき州会議員であるのは疑うべくもない。ここまで似た他人がいるはずはない。だが、画面の女は、こぎれいな純白の椅子に座っていたさっきの女性とは別人のような行動をしていた。わたしたちの依頼人は、内気で、少々オバサン風ですらあった。だが、画面の女は外向的で、やたら陽気で、まるで抑制がない。完璧に。わたしの職業上の鋭い好奇心も完璧にみたされた。ウォルターズが今日着ていた黒いドレスのほうが本人よりぶかっこうだ。

いっしょにふざけまわっているのが男女のペアなのはわかるが、何者かはわからなかった。ふたりとも動物のお面、というか、動物のコスチュームの頭部をかぶっていたのだ。そのため、すべてが非現実的なおふざけに見えた。男はロバで、女はウサギ。わがミズ・ウォルターズはそういった仮装はし



ていない。

ロバと、ウサギと、ウォルターズ議員が熱心に励んでいるのは、擬似獣姦、乱交、相互恥辱といったさまざまな倒錯行為——それを大きなブルーのベッドのうえでくりひろげていた。というか、わたしにはそれがベッドに思えた。ベッドフレームは写っておらず、マットレスが見えるだけ。枕や寝具もない。無地の壁もおなじ色調のブルーなので、マットレスの延長のように見える。画面中央でおこなわれているショーから注意をそらすものはなにもない。

わたしはだらしなく椅子に座り、紙コップに入った、ぬるいコーヒーをすすりながら肉欲シーンの進行を鑑賞した。

ジェシカは腿とお腹の筋肉のワークアウトをしながら床のうえから見ている。一度、動きを途中でとめて画面を見つめ、二、三秒してからワークアウトを再開した。見ているこっちの筋肉が痛くなる。わたしは何度か小さくうめいた。画面が暗くなるのと同時にジェシカも三回の深呼吸を終えた。彼女はしなやかな動きでさっと床から立ちあがると、ビデオのところへ歩いていった。

「感想は？」

「下品で、しろうつぽくて、むかつく」とわたしはいった。「驚いたよ。もう一度再生してくれ」

ジェシカがテープを巻きもとそうとしたとき、わたしたちはまだ残りがあることに気がついた。今回は出演者もベッドもない。画面にあらわれたのは、白い紙に書かれたダーク・グリーンの大きなボールド体の文字だった。

「だれだかわかるかい？ われわれの望みはささやかなものだ。ときどき議会で友好的な票を入れてくれるだけでいい。くわしいことはいずれ知らせる。われわれの友達になつてくれれば、こっちもあんたの友達だ。だれが友達かを忘れないように」

わたしたちはもう一度テープをはじめから終わりまで見た。ウォルターズはすぐにテープを止めてしまい、友好的なメッセージには気がつかなかったらしい。結局、その日の午後はろくでもないテープを早送り、スロー、コマ送り、逆再生、静止画を使って、ぜんぶで十二回ぐらい見た。なにを搜していたかといえ、手がかり。雨の日にタクシーをつかまえるのとおなじだったが、それでもふたつ見つかった。

「彼女の目はグリーン」わたしはいった。

「彼女？」

「ウサギのほう。依頼人じゃなくて」

「目だけ見てたわけでもないでしょ」

「おれはいつも目が気になるんだよ」

わたしはせわしないピンポン試合を思い出した。ジェシカは見逃したにきまっている。いつも細かいことは無視するんだから。

「男の目の色は？」

「黒——でなけりや茶色。とにかく濃い色だ」

ジェシカはにやにやしている。

「わかった、わかった。たしかに男のほうはちゃんと見てなかったよ。で、そういうきみは奴をどう思った、ミズ・へらず口？」

「どう見てもロバよね」

「おれが観察してたのは女の目、きみが見てたのは男の——」

「彼女の手は？」

わたしはめんくらった。「そりや、手はいろいろと役に立つ」

「すくなくとも目とおなじくらいに」

「どういうことかいえよ」

「彼女の指は小さくて、きやしゃ。爪は長くのばしてマニキュアを塗ってた。ちゃんと扱い方を心得てたわ」

「なんだいその扱い方ってのは？」

ジェシカは手をあげ、きれいにみがいてある爪をわたしの方へ向けた。爪は短く切つてある。「付け爪をしたり、いつも爪を長くのばしていたら、なにをするにしても、やたらと時間がかかるものなのよ。爪が長いことをいつも意識していなきゃならないしね。わたしだったら、忘れっぽいから、爪を折つて、まわりの人間やペットをひっかくことになるわ」

「ペットなんか飼つてないじゃないか」

「仮定よ、仮定。べつにあの女の爪が重要なんじゃない。ただ、爪をのばすことに慣れてるっていいたいの。あの女を見つけて、爪が長くなかったら驚くわ」

「男の指は？」

「長くて、骨太」

ほら、きた。「十一本目も？」